



| | |
|--------------|---|
| Title | ＜食＞から読み解くドイツ近代史 |
| Author(s) | 南, 直人 |
| Citation | 大阪大学, 2015, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/55689 |
| rights | |
| Note | やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 南 直 人 ）

論文題名

<食>から読み解くドイツ近代史

論文内容の要旨

本論文は、<食>という視点からドイツの近代史を考察してみようという試みである。ドイツの食は、18世紀から20世紀初頭にいたるまでに、外来の食物の導入・定着や都市化・工業化の影響などによって大きな変貌をとげてきた。それは、政治的分裂状態から近代国民国家形成へというドイツ近代史の大きな流れとからみ合いながら進展していった。本論文はそうした歴史的過程を、①食物自体、②食生活の実態、③食に関する政治的言説や社会的規制といった「上部構造」、という3つのレベルで考察した。

第Ⅰ部「コーヒーとジャガイモからみたドイツ近代史」では、第1章でジャガイモ、第2章でコーヒーを題材として取り上げ、主に17世紀から19世紀までのドイツの歴史の変遷が描かれた。第1章で扱うジャガイモの普及プロセスからは、たとえばドイツにおける文化的地域差の問題、あるいは18世紀の民衆啓蒙主義の社会的意義について考察が加えられた。とくに、当初はさまざまな理由ゆえにドイツで忌み嫌われたジャガイモが18世紀後半には徐々に普及していくという現象の説明として、民衆啓蒙主義を旗印としたローカルな知識人の地道な活動があったということが指摘された。さらに、19世紀においてジャガイモ料理が「市民権」を得ていく過程に関して、料理書を通じての分析が試みられるなど、この章では全体としてジャガイモを軸とした文化史的叙述がなされている。

他方、第2章で扱ったコーヒーに関しては、18世紀から19世紀末にかけてのドイツにおけるコーヒーの普及の様子が社会史的に考察されるとともに、国際社会（「近代世界システム」）の中におけるドイツの位置づけが、18世紀末と19世紀末とで大きく変化したことが指摘された。すなわち、18世紀の段階では、自国の植民地においてコーヒーを調達できないドイツにおいては、コーヒー消費を制限したり代用品を開発するという方向でコーヒーの普及に対処したのに対し、19世紀末になると、コーヒー生産国ブラジルの躍進を背景に、ドイツはハンブルクを中心に国際コーヒー貿易において大きな位置を占めることができるようになったのである。このことは、国内におけるコーヒーのさらなる普及につながり、「国民的飲料」としてのコーヒーの地位確立をもたらすこととなった。こうして、この章では、コーヒーというプリズムを通してのドイツ近代史像が示されたといえる。

第Ⅱ部「都市化と工業化のもとでの食生活の実態」では、主に都市における労働者層を中心とした、19世紀後半から20世紀初頭の時期における食生活の実態を描き出すことが試みられた。まず第3章では、都市化と工業化のもとでの食品の生産・流通・消費にかかわる諸変化の中で、とくに飲用ミルクの普及という現象が取り上げられる。飲用ミルクに着目したのは、乳製品を主食のひとつとするヨーロッパ的食文化の中で一見伝統的食品であると思われる飲用ミルクが、実は都市化・工業化のもとで初めて普及するようになった「近代的」食品であるからである。これ以外にも、食の産業化や近代的科学技術の利用によって、さまざまな新しい食品が生み出され、都市を中心に食生活が大きな変化をとげたことはいままでのないが、とくに飲用ミルクの事例を示すことによってそうした変化が印象づけられたと思われる。

第4章では、労働者家庭における食生活の実態の姿を描き出すことに眼目がおかれ、この時期の最も信頼できる家計調査史料として「低所得家庭家計調査」（1907年実施）と「金属労働者320家計の調査」（1908年実施）の2つに依拠して、労働者世帯の食物消費量をできるだけ正確に分析することが試みられた。ただし、家計調査対象家庭の選定や統計処理上の問題などもあり、年間および1日あたりの平均的消費量が算出できたのは、全ての品目ではなく肉、パン、麦粉、ジャガイモ、ミルクなどの8品目に限られる。さらに、調査対象が主として上層の労働者家庭に偏り、必ずしも下層労働者の実態は反映されていないといった統計調査上の限界もあるが、少なくとも上層の労働者に関しては、当時の食物摂取量の全国的なほぼ正確な数値が明らかになることによって食生活の実態に迫ることができた。しかしさらに数値を補完するために、ドイツの各地域ごとの食物摂取量の格差の問題にも触れ、さらに他国との比較の必要性も考えて、同時期のイギリスにおける主要食品の平均摂取量についても検討した。

第Ⅲ部では、「科学化」「規律化」というキーワードを用いて、社会的統合や健康・衛生面での一般民衆の生活の改善をすすめようという近代国民国家の意思が、食の分野においても明確なかたちで姿をあらわしてくるというプロセスが考察された。第5章「国民統合と食の世界—政治に利用される食の科学と食の教育—」では、近代栄養学の発展により食の分野における知のパラダイム転換が生じたこと、また国民国家における労働者層の統合という課題にこの栄養学が利用され、労働者層の女性への食教育が公教育分野のみならずさまざまな私的教育分野でも推進されたということが紹介された。そして、1880年代に編纂されきわめて多くの部数が刊行された、労働者層の女性向けの料理書『家庭の幸福』が取り上げられ、実際にどのような献立が推奨されたのかについても検討が加えられた。

第6章「食の安全を保証するために—食品偽装問題と食の『規律化』—」では、19世紀中葉から後半にかけて深刻化した食品偽装問題を材料として、食の「規律化」の問題が考察された。まず同時代文献を利用して当時の食品偽装についての深刻な実態（非常に有害な添加物の使用など）が明らかにされ、この問題が、ひとつには国民の健康や生命への重大な脅威となっていたこと、さらには死亡率や衛生といった国民国家の人的資源の再生産にかかわる問題となっていたことが示された。次に、この問題の克服のために対策が精力的に講じられていくというプロセスが検討され、まずは法制面での諸措置、さらには食品検査システムの構築といった諸側面が詳しく紹介されていく。とりわけ、食品の安全性を最前線で検査する食品化学者の専門職としての確立の問題、その検査を実施する食品検査施設の全国的な展開の問題などが取り上げられ、同時代文献をもとに検討される。最後に、しかしながらこうした諸施策にもかかわらず、当時の食品産業界の食の安全性の軽視の姿勢ゆえに、公衆の中での食品への不信感が根強く存在すること、それが時に食中毒事件などの食品スキャンダルを契機として表面にあらわれてくることが、実例で示されている。

以上の6章の他に、コラムとして、都市化と外食の問題、病気などに見舞われた労働者の食生活の問題、母乳哺育をめぐる小児科医や政治家の言説の問題も取り上げられている。

最後に、これらの内容を受けて、終章として「食」からみたドイツの歴史風景として、第二帝政期ドイツでは食にかかわる領域で「古典的近代」から「20世紀的近代」への転換がすすみつつあったのではないかという考察が加えられている。とりわけ、第Ⅲ部で取り上げられた食の「科学化」や食品監視システムの構築の問題は、遺伝子組み換え作物の問題や過剰栄養摂取による肥満問題といった21世紀の食をめぐる問題ともつながってくる。その意味で現在の問題の根がすでにこの時代のドイツに確実に存在しており、ここで描かれたドイツ近代という像はある種の普遍性を帯びるという指摘で本研究は締めくくられている。

論文審査の結果の要旨及び担当者

| 氏 名 (南 直 人) | | | |
|-------------------|-----|----------|--------|
| | (職) | 氏 名 | |
| 論文審査担当者 | 主 査 | 大阪大学 教授 | 竹中 亨 |
| | 副 査 | 大阪大学 教授 | 藤川 隆男 |
| | 副 査 | 大阪大学 准教授 | 中野 耕太郎 |
| 論文審査の結果の要旨 | | | |
| 以下、本文別紙 | | | |

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： <食>から読み解くドイツ近代史

学位申請者 南 直人

論文審査担当者

| | | |
|----|---------|--------|
| 主査 | 大阪大学教授 | 竹中 亨 |
| 副査 | 大阪大学教授 | 藤川 隆男 |
| 副査 | 大阪大学准教授 | 中野 耕太郎 |

【論文内容の要旨】

本論文は、食文化という視角から近代ドイツ史を照射した意欲的な試みである。食文化史は歴史学の諸領域のなかでも、ことに新しい領域であり、本論文はそのパイオニア的研究といってよい。そのため、本論文は食文化史に関わる論点を幅広く扱っている。以下、章ごとに内容を紹介する。

まず序章では、ドイツの食文化の歴史的变化の大筋を描いている。すなわち、ヨーロッパ全体としては、食生活の大変動は 16 世紀の大航海時代に生じたのに対して、半周縁にあったドイツではその影響はさほど顕著ではなかった。むしろ、ドイツでの食文化の変動は 19 世紀の工業化で生じたと説く。

第 1 章、第 2 章はそれぞれジャガイモとコーヒーという新来の食品の定着過程を跡づける。ジャガイモの普及に大きな役割を果たしたのが、農民と接点をもつ地方の啓蒙主義的知識人であった。やがて 19 世紀半ばには、ジャガイモは上層も含めて国民全体に受け入れられていった。コーヒーの普及も緩慢だった。植民帝国をもたないドイツは、コーヒーを自前で供給することができなかったからだった。ところが、19 世紀末にブラジルがコーヒー生産国として台頭すると、ハンブルクが国際的なコーヒー取引の中心地に成長した。これによってドイツ社会でのコーヒー消費も増大し、労働者の間にまで普及が進んだ。第 3 章も、牛乳という食品を扱うが、ここでは技術革新と食品消費の連関が一つの焦点となる。すなわち、都市での牛乳飲用の拡大の背景にあったのが、近代的酪農業の成立と鉄道網の拡大だった点に着目するのである。同時に、食文化の変化が衛生問題という社会的問題を惹起したことを指摘する。

第 4 章は、食生活の変化を計数的・総体的に捉える試みである。家計調査の分析を通じて、カロリー摂取の時代的变化、食生活の地域的偏差を明らかにしようとしている。

それ以後の章は、食を軸にした社会的規律化の進展に照明を当てている。まず第 5 章は、国家の要請として食の科学化が進んだことを説く。それは栄養学を生み出す一方、食教育が教育による規律化の一環として実施された。規律化のもう一つの表れとしての食品監視体制を扱うのが第 6 章である。食品の多様化、流通発達による消費者の拡大、同業組合の監視力の減退等の結果、ドイツでも食品偽装が 19 世紀半ばより深刻化した。対策として食品監視が始まり、かくして食生活の次元に公権力が介入した。具体的には、これは法令の整備と検査体制の樹立として表れた。前者では、1879 年に食品偽装の禁止法を筆頭に法令が整備され、食品の安全基準の制定が進捗

した。後者では、食品化学者の育成と専門職としての確立、国家による資格試験制の導入が進んだ。20世紀に入ると、食品検査施設の整備も進んだ。とはいえ、食の規律化が必ずしも円滑に進行したわけではない点にも注意を向けている。食品業界からの抵抗は強く、その結果、規制が業界の意向に沿ったものになる場合がままあったからである。

終章では、緒に就いたばかりの食文化史の研究が、今後本格的に発展するうえでの課題を整理している。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、食文化史という新たな領域を切り拓いたパイオニア的研究である。日本の西洋史学研究では、1980年代の生活史研究の一環としてこの分野の開拓が始まったが、本論文の筆者はその頃より一貫して食文化研究をリードしてきた。先行研究の蓄積が乏しいなかで、ドイツ近代について食という観点から一つの歴史像を描き出したことは、本論文の最大の功績であり、その意義は高く評価されるべきである。また、パイオニアとしては、食文化全体を偏りなく扱うことが求められるが、本論文も内容的に実に幅広いものをもっている。個々の食品の普及から食の流通の発展、食生活の変化から食に関わる言説まで、多種多様な論点やテーマを扱っている。これにより、本論文は後続の食生活史研究に堅固な土台を築いたと言ってよい。

その半面、個々のテーマの考察において、若干の粗さが感じられることは否定できない。たとえば、コーヒーなど新来食品の普及においては、食品に付随する社会文化的意味にいかなる変化が生じるかという文化移転論的視角が問われようが、本論文ではこのような視角に十分な照明があたっているとはいいがたい。また、社会的規律化を説く際に、国家や業界には焦点を当てるものの、消費者がいかなる動向を示したかへの目配りが不十分のきらいがある。また、規律化を主として政治権力との関連で捉えるのは、社会的規律化を論じるうえではいささか狭きに失する懸念がある。とりわけ、食という人間の中心的な営みだけに、社会的権力が多様な行使形態をとることに注意を向ければ、より深みのある分析が可能になったものと思われる。

もともと、パイオニア的研究である以上、個々の論点で粗さを含むのは避けられない運命である。むしろ、こうした問題点を含むことによって、逆に今後の研究が克服すべき課題を明示していると積極的に考えるべきである。

以上のような理由から、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。